

# 働く母親はどのように家庭教育に関わるのか

——就学前から形成される〈教育する家族〉の格差と葛藤——

額 賀 美紗子・藤 田 結 子

## 要 約

本研究は、ペアレントクラシー下での母親の教育責任の増大に注目し、働く母親の家庭教育をめぐる葛藤と家庭教育を通じた格差形成を明らかにする。この目的のため、就学前の子どもをもつ働く母親に半構造化インタビューを行い、彼女たちが家庭教育をどのように捉え、父親とどのように分担しているのかを階層視点から検討した。42名を対象とした分析から、「教育する家族」の子育てが、①父母協働志向の〈親が導く子育て〉、②母親に偏った〈親が導く子育て〉、③父母協働志向の〈子どもに任せる子育て〉、④母親に偏った〈子どもに任せる子育て〉に分化していることを示した。このモデルからは、子育て理念と父母のかかわりの違いが組み合わさることで、家庭教育を通じた大きな格差が就学前から生じている可能性が示唆された。また、働く母親の葛藤が、「親が導く」子育ての圧力と家庭教育への父親の関与の少なさによって生じていることも明らかになった。

キーワード: 「教育する家族」、父母役割分担、階層間格差

2021, 家族社会学研究, 33(2): 130-143

## How Do Working Mothers Engage in Children's Education at Home?: Inequality and Dilemma in an "Educating Family" during Early Childhood

Misako Nukaga and Yuiko Fujita

### Abstract

Studies suggest that parentocracy is exacerbating working mothers' responsibility for children's education as well as social class discrepancy. This study examines how working mothers with preschool children perceive their education at home and how they share the responsibility with their husbands. Based on semi-structural interviews with 42 mothers from various educational backgrounds and occupations, the child-rearing of "educating families" diverged into four patterns, distinguished by the couple's relationship as well as the logic behind child-rearing. The model suggests that the logic of child-rearing and also the ways in which the couples share educational responsibility are relevant to a mother's working dilemma. It also implies that educational inequality in the home environment is already formed during early childhood through different approaches to child-rearing and a father's educational involvement. These results call for policies and practices that provide support to families who have limited financial and relational resources for children's educational opportunities. They also suggest the need to support a father's engagement in children's education and thus ease the burden of working mothers.

*Key words:* "educating family", maternal and paternal roles, social class inequality

2021, Japanese Journal of Family Sociology, 33(2): 130-143

ぬかが みさこ: 東京大学教育学研究科

Graduate School of Education, The University of Tokyo, 7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033, Japan

E-mail: nukaga@p.u-tokyo.ac.jp

ふじた ゆいこ: 明治大学商学部

School of Commerce, Meiji University, 1-9-1 Eifuku, Suginami-ku, Tokyo 168-8555, Japan

E-mail: yfujita@meiji.ac.jp

## I. 研究の目的

少子高齢化に伴う労働力人口の減少が進む中、今日の日本社会では女性労働者の活用がめざされている。現状をみると1990年代には共働き世帯が専業主婦世帯の数を抜き、この10年で女性の就業率は著しく増加して2020年には7割を超えた（総務省統計局 2020）。しかし、国際的には日本の女性の就業率は未だ低い水準にある。結婚・出産によって仕事を辞める女性は減ったものの、第一子出産後の就労継続率は53.1%にとどまり、半数近くの女性は出産後、専業主婦になる選択をしている（国立社会保障・人口問題研究所 2017）。また、先進国では通常、学歴の高さが就業率の高さに結びつくが、日本の場合は大卒女性の就業率が5割を切っており、特異性が際立つ（西村 2014）。

女性が出産後に仕事を辞めてしまうのはなぜか。その背景の一つに、「より良い子育て」を母親に要求する性別役割観が日本社会に広く浸透し、特に子どもの教育に対する母親の責任が強調されていることが挙げられる（本田 2008; 品田 2016）。高度経済成長期以降、日本では子どもの人格形成と学歴獲得のために家庭教育に邁進する「教育する家族」が自明視されてきた（広田 1999; 神原 2001）。近年の新自由主義の風潮は子どもの教育に対する家族の責任を一層強調してペアレントクラシー（Brown 1990）を推し進め、母親たちを子どもの教育に駆り立てる傾向が強化されている（喜多 2012）。特に高学歴の女性ほど子どもの教育への関心が高く、全方的に子どもの能力を伸ばす必要性を感じ、その結果として家庭教育を通じた格差が生じている（本田 2008）。

共働き世帯が6割を越える中、家庭教育をめぐる働く母親の葛藤と階層間格差の形成は今後より一層重要な課題となっていくことが予想される。しかし、その内実を明らかにした研究は未だ少ない。家族社会学では、女性の就労を妨げる要因として家庭内の性別役割分業体制に注目してきた。だが、働く母親が子育てに関してどう考え、父母

でどのように家庭教育を分担しているのかという視点から仕事と子育ての両立困難を検討した研究は乏しい（神原 2001; 天童・多賀 2016）。一方、教育社会学では家庭教育を通じた社会的不平等の再生産に注目した研究が増えている。しかし、調査対象が高学歴の専業主婦世帯に偏りがちである。そのため、働く父母がどのように家庭教育にかかわり、その様相に階層差がどのように現れるかについては十分に明らかにされていない。

そこで本研究では、就学前の子どもを育てながら働く母親に焦点化し、半構造化インタビューをもとに、彼女たちが家庭教育をどのように捉え、父親とどのように分担しているのかを階層差の視点から検討する。この作業を通じて共働き世帯の中で「教育する家族」が分化していることを示し、その類型モデルにもとづいて家庭教育をめぐる働く母親の葛藤と就学前段階からの階層間格差の形成を考察する。

## II. 先行研究のレビュー

### 1. 「教育する家族」と格差の再生産

「家庭教育」は、家庭内における子どもの社会化、しつけを指す営みであると同時に、学校教育の学習面での補完および子どもの地位達成を目的とした親の意識的働きかけを指す（天童・多賀 2016）。こうした家庭教育の萌芽は大正期の都市中間層に見出されるが、専業主婦が増加して学歴競争が激化した高度経済成長期に広範に日本社会に広がった（広田 1999）。広田（1999: 126）によれば、現代の日本では親が「人格も学力も」という全方位型の教育関心を強く抱く「教育する家族」が主流になっている。母親たちはしつけや学習の指導だけでなく、子どものジェネラル・マネージャーとして、塾や習い事などの「手配と判断と責任を一身に引き受けた存在」になることが社会的に期待されている。

「教育する家族」が大衆化し、家庭が子どもの教育に全面的に責任を負うことが自明とされる一方、近年は親の学歴や収入の違いを反映した家庭

教育の格差が問題視されるようになった。教育社会学の領域では、ブルデューの文化的再生産論 (Bourdieu 1986) やコールマンの社会関係資本 (Coleman 1988) の概念を参照しながら、子育ての階層差とそれが子どもの地位達成に与える影響を検討する研究が蓄積されている。

本田 (2008) は、アメリカでミドルクラスと低所得・貧困層の子育てを比較した Lareau (2011) の枠組みを援用して、小学生の子どもをもつ母親を対象に階層と子育ての関連を調査した。その結果、日本ではアメリカほど顕著な子育ての階層差はみられず、全般的に「教育する家族」が規範として維持されていることが示された。だが、高学歴の母親ほど旧来の学力に加え、意欲や創造性、コミュニケーション能力といった「ポスト近代型能力」を育てようと、自らの時間、労力、知識、経済力を総動員していると分析されている。ほかの実証研究でも、高学歴・ホワイトカラー、都市居住の親ほど所有する経済資本、文化資本、社会関係資本を最大限に活用しながら学業達成に有利なハビトゥスを子どもに継承していることが指摘されている (荻谷・志水 2004; 片岡 2018; 石川・杉原・喜多・中西 2018; 荒牧 2019)。

家庭教育の格差は就学前から形成されていると予想されるが、階層的視点から就学前の家庭教育を扱った研究は未だ少ない。その中で、Yamamoto (2015) や金南・伊佐 (2019) は母親が専業主婦／パートで働く家庭を主な対象としたインタビュー調査をもとに、非大卒に比べて大卒の親は就学前から学校教育との接続を意識した計画的な子育てを行っていることを見出した。幼児期の教育はもともと私事性が高いが (濱名 2011)、2000年代以降は格差社会言説の中で階層下降を回避したいミドルクラスの家族が子どもの早期教育により一層熱心になっている (天童 2013)。

こうした状況をふまえ、家庭教育を通じた就学前からの階層再生産過程を明らかにする研究が必要とされているが、先行研究の主な調査対象は高学歴の専業主婦に偏っている。共働き世帯が増大

する一方で、働く母親がどのように就学前の家庭教育に携わっているかについては十分解明されていない。そこで次に、母親の就労と子どもの教育を視野に入れた研究を整理する。

## 2. 母親の就労と「教育する家族」の間のジレンマ

働く母親と子どもの教育に関する研究は、母親の就労が子どもの教育達成や社会化に与える影響を解明するもの<sup>(1)</sup>と、母親の就労と家庭教育の相互関連を明らかにするものに大別される。ここでは本稿の関心に沿って後者を取り上げる。

子育ての責任を母親に帰する性別役割規範は、個人主義と業績主義が徹底される職場の原理と矛盾を生じさせ、働く母親を板挟み状態にすることがアメリカ社会で指摘されてきた (Hochschild 1997; Hays 1998)。日本でも「教育する家族／母」の規範は強く、母親たちは働きながら家庭教育に携わることに葛藤を抱えている。平尾 (2004) によれば、進学塾を最も多く利用するのは経済的に余裕のあるフルタイムの母親ではなく専業主婦である。なぜなら、こうしたサービスを楽しむためには親子の生活時間と塾の時間をすり合わせてお弁当をつくるといった「母親のより一層のコミットメントが必要」になるからだという。日本では専業主婦であることが「教育的望ましさ」として正統的価値を付与されている (喜多 2012)。専業主婦を想定したシステムの中で、働く母親は子どもの教育にコミットする時間や労力を捻出できない葛藤を抱えざるをえない。

仕事と家庭教育のジレンマに注目した額賀・藤田 (2021) は、乳幼児を育てながら働く母親たちが時間負債 (Hochschild 1997) のジレンマを経験し、学校教育へのレディネスを重視した教育的な時間と、自由な遊びや家族団らんの時間のどちらを重視するか悩むことを明らかにしている。大卒の母親が自分の仕事と折り合いをつけながら教育的意図が入った子どものさまざまな活動に時間を費やすのに対して、非大卒の母親は長時間労働の合間の休息を確保するためにも子どもの自由な遊び時間を重視する傾向がみられた。

以上の研究は、母親たちが働くことと「教育する家族」の規範の間で板挟みになり、ジレンマを経験していることを指摘する。また、その葛藤への対処として家庭教育のあり方が階層によって異なり、共働き家庭の間に格差が生じていることを示している。こうした働く母親たちの葛藤を包括的に捉えるためには、母親だけではなく、父親がどのように家庭教育に携わっているかを視野に入れる必要がある。しかし、家庭教育における父母の役割分担については研究がほとんどない。最後にこの点について先行研究を整理する。

### 3. 「教育する家族」における父母の役割分担

国際調査では日本の父親の家事育児時間の少なさが際立つ結果が示されているが、近年は男女共同参画の流れの中で家事育児に関わる父親が増えてきたといわれる。子育てを「世話・遊び・しつけと教育」の三側面からとらえた大和ほか(2008)は、母親の期待を反映して片働きの父親が「遊ぶ」中心の育児意識であるのに対し、共働きの父親は「世話・遊び・しつけと教育」に関わる多面的な育児意識をもつ傾向があることを明らかにした。また、妻が高収入でフルタイム就労の場合、公平に家事育児を分担する志向が強いこと、妻がパートの場合は家計の補助役割と家事育児の両方を担う「二重役割」への志向が強くなることも指摘されている(矢澤ほか 2003)。

父母の役割分業に関する研究は豊富にあるが、家事や子どもの世話に焦点化したものが多く、家庭教育の分担は十分解明されていない。「教育する家族」は、家父長制を反映した権威としての父親像を想定しており、実際に子どもの教育環境を整え、子どもを指導するのは母の役割とされてきた(広田 1999)。しかし、多賀(2011)によれば、2000年頃から父親が子どもの学校選択や受験勉強に積極的に関わるのが商業雑誌で喧伝され、格差社会の中で子どもの教育達成に不安を覚えるミドルクラスの父親を惹きつけている。

父親の家庭教育への参入と働く母親の増加は、「教育する家族」の分化をもたらしていると予測

される。この点について、神原(2001)は父母の役割分担と格差視点を含んだ有用なモデルを提供している。そこで示されるのは①高学歴・高所得の父親と高学歴・専業主母からなる“典型的な”〈教育する家族〉、②仕事も家事も子育ても父母で分担・協力するという“脱近代型”〈教育する家族〉、③父親はもっぱら仕事で、母親が仕事と家事と子育てを引き受ける“新・性別役割分業型”〈教育する家族〉、④労働者中心とする低階層の〈教育する意志はある家族〉の分類である。母親が働く場合は②③④の類型が該当するが、実証研究の不足によってモデルの精緻化が十分果たされていない。階層的に多様な家族のデータをもとに、共働き世帯における「教育する家族」の分化と格差がどのように生じているか、父母の役割分担に注目して明らかにする必要がある。また、そのように分化した「教育する家族」が、働く母親の経験するジレンマとどのように関連しているかも検討すべき課題である。

### 4. リサーチ・クエスチョン

以上の先行研究をふまえ、本研究では就学前の子どもをもつ働く母親たちが、(1)どのように母役割と家庭教育を意味づけ、(2)どのように父親と分担しながら家庭教育を実践しているかを、働く母親たちへのインタビュー調査をもとに階層的な視点から明らかにする。家庭教育を把握するにあたっては天童・多賀(2016)や大和ほか(2008)の枠組みを援用し、「しつけ・教育(学校教育へのレディネスや地位達成を目的とした働きかけ)」と、しばしばそれと対置して親たちに語られた「遊び」へのかかわりに注目する。上記のリサーチ・クエスチョンを通じて、「教育する家族」の分化モデルを提示し、家庭教育をめぐる働く母親の葛藤と、家庭教育を通じた就学前からの格差形成の問題について考察する。

## III. 調査方法

2016年から2020年にかけて、0～6歳までの未就学児が少なくとも一人いる、首都圏在住の20

代から40代の働く母親55名に対して半構造化インタビューを複数回行った。協力者は、平均世帯年収が600～700万円の2自治体、500～600万円の1自治体、400～500万円の2自治体で複数の保育園を拠点に雪だるま式に募集し、学歴や職業の多様性確保に努めた。学歴別では、四大卒以上が32名、短大卒が4名、専門卒が11名、高卒が8名である。先行研究の質的調査も対象者が大卒に偏っているが、本調査でも非大卒者は調査へのインセンティブが少なく、複数の保育園を渡り歩いてリクルートに努力を重ねた。本稿では居住地域、短大、専門卒、高卒（以下、非大卒）と四大卒（以下、大卒）のバランスをとるため大卒9名を省いた。また父母分担に注目するためシングルマザー4名も除外した。結果として就学前の子どもを育てる大卒22名と非大卒20名の計42名を対象に分析を行う。

42名の母親および父親の学歴、職業、就業形態について次頁の表にまとめた。大卒の母親は正規雇用の専門職か会社員、専門卒は正規雇用の専門職、高卒は非正規雇用が多い。大卒の母親の大多数の夫は大卒で専門職か会社員である。非大卒の母親の3分の2は夫が非大卒であり、製造作業員や建設作業員、整備工などブルーワーカーが多い。なお、この表には後述する子育て類型を①～④の形で記載している。

協力者へのインタビューは筆者ら2名が分担して行った。協力者には調査趣旨を説明し、データは学術目的以外には使用しないことを伝えた上で協力の承諾を得ている。協力者の自宅か、自宅近辺の店で実施し、筆者らが共同で作成したインタビュー・ガイドに沿って1～3時間にわたって質問をした。質問項目は、生い立ち、教育歴、職歴、家事育児と就労の状況、父親との分担、子育て観、平日と週末の過ごし方、家庭教育の内容、母役割意識、キャリア意識、仕事や子育ての不安など、仕事と育児に関わる事項を網羅した。

録音したデータはすべて文字起こした。分析に際しては修正版グラウンデッド・セオリー・ア

プローチ（木下 2003）を参照し、MAXQDAのソフトウェアを用いてまずオープン・コーディングを行った。コードと先行研究を往還する過程でリサーチ・クエスチョンを明確化し、家庭教育の考え方と父母役割分担にもとづいて子育ての類型を抽出した。

## IV. 調査結果

### 1. 母役割と家庭教育への意味づけ

#### 1) 共通するしつけ意識

まず、働く母親たちの母役割と家庭教育への意味づけについて検討する。「しつけ」の側面に関しては、学歴や職業、就業形態にかかわらず、母親たちが責任感をもって実践していることが明らかにになった。

食事をなるべく決まった時間に食べさせるようにはしていますね。バランスとか考えて、量までは言わないんですけど。ただできれば一口ずつでも一応「いろいろ食べようね」みたいなのは。（Aさん 派遣事務員・高卒）

テレビとかゲームとか最近すごく興味があるので、やりたがるので。そうすると、まだ時間の感覚がないのでやりたいだけやっちゃうので、それは1日1時間とか。（Bさん 看護師・大卒）

母親たちがしつけの対象として挙げたことは、起床就寝時間、テレビの視聴、ゲームの時間、着がえや歯磨き、言葉遣い、挨拶、片づけ、食事の作法、食べ物の好き嫌い、掃除、洗濯の手伝いなど多岐にわたった。日常生活の細部にわたるしつけは、家庭内のルールを決め、子どもに随時声をかけるなど手間と時間がかかる。母親たちは働きながら子どもをしつけることの難しさを口々に語った。特に、子どもの就寝時間やテレビの視聴時間を管理することの難しさが多く言及され、「帰宅が遅いから寝るのがついつい9時とか10時

表 インフォーマントの年代, 子年齢, 父母の学歴・職業・就業形態 (子育てタイプ別)

ID	本稿で 使う仮名	子育て タイプ	年代	子の年齢	母親 学歴	父親 学歴	母親 職業	父親 職業	母親 就業形態	父親 就業形態
1		①	30代	4, 6	専門卒	高卒	NPO職員	公務員	正規	正規
2		①	40代	5, 5	専門卒	短大卒	服飾技術者	会社員	正規	正規
3	Fさん	①	40代	3, 8	短大卒	専門卒	会社員	会社員	正規	正規
4	Gさん	①	30代	1, 4	大卒	大卒	会社員	会社員	正規	正規
5		①	30代	4	大卒	大卒	医療従事者	会社員	正規	正規
6	Cさん	①	30代	3	大卒	大卒	NPO職員	会社員	正規	正規
7	Eさん	①	30代	2, 4	大卒	大卒	会社員	会社員	正規	正規
8		①	30代	0, 4	大卒	大卒	会社員	会社員	正規	正規
9		①	30代	0, 4	大卒	大卒	会社員	会社員	正規	正規
10		①	30代	0, 2, 4	大卒	大卒	教員	会社員	正規	正規
11		①	30代	1, 3, 5	大卒	大卒	会社員	会社員	正規	正規
12		②	30代	6, 9, 12	高卒	中卒	会社員	自営	非正規	自営
13		②	40代	3, 6	高卒	専門卒	介護福祉士	介護福祉士	正規	正規
14	Hさん	②	30代	0, 3	専門卒	高卒	看護師	会社員	正規	正規
15		②	40代	0, 6	専門卒	大卒	看護師	会社員	正規	正規
16		②	30代	2	短大卒	大卒	会社員	会社員	正規	正規
17		②	30代	0, 2	大卒	高卒	会社員	自営	正規	自営
18	Iさん	②	30代	2, 6	大卒	大卒	会社員	会社員	正規	正規
19		②	30代	2, 6	大卒	大卒	教員	高校教師	正規	正規
20		②	30代	5, 5	大卒	大卒	会社員	会社員	正規	正規
21	Bさん	②	30代	3, 5	大卒	大卒	看護師	会社員	正規	正規
22	Aさん	③	40代	5	高卒	高卒	派遣事務員	会社員	非正規	正規
23		③	30代	2	高卒	高卒	会社員	会社員	正規	正規
24		③	30代	3, 9	専門卒	大卒	美容師	会社員	非正規	正規
25	Kさん	③	30代	3, 5	専門卒	大卒	社会福祉士	社会福祉士	非正規	正規
26		③	30代	2	短大卒	大卒	保育士	会社員	正規	正規
27		③	30代	5, 7	大卒	大卒	NPO職員	自営	非正規	自営
28		③	30代	0, 4	大卒	大卒	保健師	大学職員	正規	非正規
29	Jさん	③	40代	4, 6	大卒	大卒	会社員	大学教員	正規	正規
30		③	30代	0, 5	大卒	大卒	大学職員	会社員	正規	正規
31		③	30代	4, 8	大卒	大卒	会社員	会社員	正規	正規
32		③	30代	0, 3, 6, 8	大卒	大卒	会計士	会計士	正規	正規
33	Mさん	④	30代	1	高卒	専門卒	介護士	整備工	正規	正規
34	Dさん	④	30代	5, 9, 12	高卒	高卒	販売店員	会社員	非正規	正規
35		④	30代	3	高卒	高卒	販売店員	会社員	非正規	正規
36		④	20代	0, 3	専門卒	中卒	看護師	工場作業員	正規	正規
37	Lさん	④	30代	1, 5, 7	専門卒	高卒	医療従事者	会社員	正規	正規
38		④	30代	5	専門卒	高卒	医療従事者	会社員	正規	正規
39		④	30代	0, 2	専門卒	大卒	会社員	会社員	正規	正規
40		④	30代	1, 3	大卒	専門卒	自営	会社員	非正規	正規
41		④	30代	2, 4	大卒	大卒	公務員	公務員	正規	正規
42		④	40代	1, 1, 10	大卒	大卒	会社員	会社員	正規	正規

\*子育てタイプの類型: ①父母協働志向の〈親が導く子育て〉, ②母親に偏った〈親が導く子育て〉, ③父母協働志向の〈子どもに任せる子育て〉, ④母親に偏った〈子どもに任せる子育て〉

になっちゃう」「いけないなど思いつつ、掃除とか洗濯したいからテレビ見ててもらおう。通算すると1時間以上」といった語りが聞かれた。

Hochschild (1997) によれば、働く母親たちは「本当に必要なケア」だけを見極め、子どもたちのニーズを最小化することで、時間の板挟み状態を回避しようとする。本調査の母親たちもしつけの「手を抜く」ことで仕事と子育ての間の軋轢を緩和しようとしていた。しかし、そのことの後ろめたさも同時に語られ、アメリカの母親たちのように子どもに対する感情をダウンサイズする(Hochschild 1997) ことには成功していなかった。この背景には、日本の母親の間にみられる強い母役割観と子どもの気持ちや関心を重視する子ども中心主義(広田 1999; 落合 2019) が影響していると考えられる。

## 2) 教育的意識の違い——〈親が導く子育て〉と〈子どもに任せる子育て〉

次に、家庭教育の「学校教育へのレディネスや地位達成を目的とした働きかけ」という面に注目すると、母親たちの間には異なる見解がみられた。一つは、そうした教育を肯定し、積極的に子どもの教育環境を整え、子どもの知的好奇心や学習態度を培うことを親の役割とする考えである。協力者の半数が該当し、本稿ではこれを〈親が導く子育て〉と名づける。次に示すCさん(会社員・大卒)の語りはその代表的なものである。

やっぱり夕飯の前に必ず勉強するとか、そういうのはすごく大事だから。後から自分自身につけられるものでもないですよ。本当に基礎的なこと、自分で読んでとか、読み取る力とか、そういうところまでは親がしっかりやって、あとは本人次第ですけど。(Cさん 会社員・大卒)

〈親が導く子育て〉を支持する母親の間には、知育玩具の購入、絵本の読み聞かせ、ドリルと一緒にとりくむ、文字や数を教える、多くの習い

ごとをさせるなど、教育的効果を意識した実践が多くみられた。

一方、残りの半数の母親は、教育に親が積極的に関わることをよしとしなかった。ここには「本人がやりたいこと」を重視し、親は後方から応援するという子ども中心主義が前面に出た態度がみられた。本稿ではこれを〈子どもに任せる子育て〉と名づける。次のDさん(販売店員・高卒)の語りにその特徴が表れている。

こっちからあんまり要求してもあれかなっていうのはあって。習いごともそうなんですけど、これを親からやってとか、そういう感じではなく、もうとりあえず自分がやりたいと思ったらやってもらい、自分の好きなようにっていう感じですかね。(Dさん 販売店員・高卒)

Dさんは子どもの大学進学に関して、「(希望は)特にない。本人がやりたい目的があり、行きたいっていうのであればサポートしていこうかなと思ってます」と話した。〈親が導く子育て〉では大学進学が自明視され、それに向けた学力形成が志向されていたのに対し、〈子どもに任せる子育て〉では、「本人次第」「好きにすればいい」といった語りが多く聞かれた。習いごとの数や家庭学習の時間は相対的に少なく、母親たちは自由な遊びや家族で過ごす時間の大切さを強調していた。

階層という点からみると、〈親が導く子育て〉を支持する母親は大卒が13名、非大卒が8名(短大卒2名、専門卒4名、高卒2名)、〈子どもに任せる子育て〉を支持する母親は大卒が9名、非大卒が12名(短大卒1名、専門卒6名、高卒5名)であった。〈親が導く子育て〉の方が大卒層に支持される傾向はあったが、はっきりとした階層差がみられたわけではなかった。大卒者の4割は〈子どもに任せる子育て〉を支持し、その理由として子どもが小さいうちは自由にのびのび育てたいこと、さらに働いていて忙しいので「週末くら

いは家族でゆっくり過ごしたい」といったことが挙げられた。

母親の葛藤という点では、〈親が導く子育て〉を支持する母親たちの間にしつけに加えて子どもの教育に十分コミットできないことへの焦燥感が強く表出した。この中には大卒者が多くいたが、自分のキャリアよりも子どもの教育や情緒の安定を優先したいという語りがみられた。例えば、大手企業で働くEさん（大卒）は子どもの小学校受験を視野にいれて複数の習いごとを掛けもちする。彼女は最近管理職に昇進したが、「小学校にあがって生活が回らないってなったら全然そこはキャリアを辞めるつもり」と話す。〈親が導く子育て〉では、子どものジェネラル・マネージャー（広田1999）として多くの時間と労力を割くことが必要とされ、母親のキャリアを二の次にさせている。

## 2. 家庭教育における父母の分担——4タイプ

次に父母の役割分担に注目して「教育する家族」の分化をさらに検討する。母親の語りからは、①父母協働志向の〈親が導く子育て〉（11名）、②母親に偏った〈親が導く子育て〉（10名）、③父母協働志向の〈子どもに任せる子育て〉（12名）、④母親に偏った〈子どもに任せる子育て〉（9名）の4タイプに分類できた。以下では各子育てタイプごとに分担状況を明らかにし、階層の影響と母親の葛藤を考察する。

### 1) 父母協働志向の〈親が導く子育て〉

一つ目の「教育する家族」は、「父母協働志向の〈親が導く子育て〉」である。父母が子どものしつけや教育について頻繁に相談をし、父親もしつけ、読み聞かせや学習、習いごとの検討と送迎、園のイベントや保護者会などによく関わる様子がみられる。複数の父母が、LINEやGoogleカレンダーを使って習いごとやイベントなど子どもに関わる情報を共有していた。IT企業で働くFさん（短大卒）は、「ナレッジ・シェアリングは仕事の基本」なので子育てについても父母間で情報共有に努めていると話す。

（保育園の）懇談会のときとかに何を話し合おうかっていうのをリストアップして、それで（夫に）話に行ってもらったりとか、情報を共有できる？って聞いて情報をやっぱりLINEですけど共有して、その情報をもとに先生と話したりとか。（Fさん 会社員・短大卒）

特筆すべきは、父親たちは必ずしも教育的関心が高いわけではなかった点である。しつけに関しては「私より厳しい」という回答が多かった一方で、「夫の方が教育熱心」と答えたのは11人中2人だった。大半のケースで、子どもの教育環境やスケジュールの管理を主導していたのは母であり、父親は母親の相談を受けて意見したり、母親が計画した活動に付き添ったりするといった補助的な役割だった。外資系企業で働くGさん（大卒）は「夫を巻き込み巻き込みやってきた」と話したが、こうした母親の「巻き込み戦略」によって父親の教育関与が促されていた。

要するに、日常的に子どもの様子を注意深く観察して学びに伴走したり、教育情報を方々から入手して子どもにどういった教育環境が必要かを考えたりする仕事は母親の役割として残されていた。家庭教育に関する平等な役割分担が実現していたとは言いがたいが、父母の協働志向はみられた。家庭教育へのかかわりについて母親から父親への不満は少ない。父親と相談しながらしつけと教育的な働きかけを一緒に進めていく中で、母親たちの家庭教育の負担は軽減されていたといえる。

このタイプを支持する父母の学歴をみると、11組のうち両方大卒が8組、両方非大卒が3組であった。高学歴父母に限定されないものの、4タイプの中では最も父母の学歴が高く、正規雇いで高収入の傾向がみられた。母親が高収入であるほど夫に対する家事育児分担の交渉力が増し、父母の平等志向が高まるとされているが（大和ほか2008）、本調査の結果もそうした知見に沿う。また、大卒・共働き高収入の父母が共に子どもの教

育に関わるということは、家庭の経済資本のみならず、文化資本や社会関係資本の伝達も増強することになり、子どもの学業達成に有利に働くことが予想される。

## 2) 母親に偏った〈親が導く子育て〉

〈親が導く子育て〉を支持する母親のうち半数は上述のように父親と協働で家庭教育を実践していたものの、残りの半数は父親の関与を得ていなかった。母親たちは子どものしつけや教育について父親が「基本何も言ってこない」「別にやりたいようにやればいいじゃんって言うだけで」「関与は習いごとの月謝ぐらい」「私がやるもんだと思っている」などと父親の無関心を指摘していた。本稿では、母親だけが積極的に家庭教育を行う子育てを「母親に偏った〈親が導く子育て〉」と呼ぶ。

このタイプの子育てを実践する母親の語りからは、子どもと遊ぶ父親像が浮かびあがった。例えば、保育園で看護師をしているHさん（専門卒）は、「人並みに生きていくためには何かひとつでもふたつでも能力がない」と話す。彼女は教育熱心で、「数は生活の中でお菓子をあげるタイミングとかお風呂あがるときに10まで数えるとか」など、日常生活の中で意識して教育的な働きかけを行う。水泳を習わせており、今後は「指の動きとか右脳と左脳を同時に使って結構いいから」ピアノも習わせたいが、「夫はピアノやったところで別に何も身につかないって意見が合わない」と語る。夫としつけや教育の話をすることはないという。

夫は何も考えてない。別に、自分もたぶん高卒だからっていうのもあると思いますけど、別にやりたいようにやればいいじゃん、先になってみないと分かんないって言う。私がいいろいろ、先を、先を、先をって考えるタイプで、主人はその場になって考えるタイプなので。(Hさん 看護師・専門卒)

Hさんは子どもの教育に対する夫の無関心さに腹を立てながらも、「(夫は)子ども大好きなんで、家帰ったらすぐ遊んでくれる」と話す。このように、母親たちからは父親が子どもと遊ぶことが強調された。しつけについては父親が時々関わるという声が聞かれたが、子どもに対して威圧的になりすぎるといった危惧も語られた。この子育てタイプでは伝統的な性別役割分業における父親の権威の表出もみられる。

父母協働志向と比べると、母親に偏った〈親が導く子育て〉を実践する母親たちは家庭教育の困難を多く語った。会社員のIさん（大卒）は新聞記者の夫が毎日22時過ぎに帰宅し、世話も教育的なことも何も頼めないという。彼女は子どもに英語を習わせていたがフォローできなくてやめたこと、通信教育を続けているが子どもが自分からやろうとしないことについて、「自主的にやるのかなと思いきややらないから、そう、多分あたしのせいなんですよね」と自嘲気味に語る。

母親に偏った〈親が導く子育て〉を支持する父母の学歴は、両方大卒が4組、片方大卒が3組、両方非大卒が4組で、学歴の影響は明確ではない。ただ、母親たちの多くが専業主婦願望や性別役割分業意識を強くもっていた。こうした意識は父親の教育的無関心に対する不満を封じ込める一方、自らが教育責任を十分に果たせないことに対する焦燥感につながっていた。

## 3) 父母協働志向の〈子どもに任せる子育て〉

三つ目のタイプは、子どもの「やりたいこと」を支える環境を父母で協力して作っていく、「父母協働志向の〈子どもに任せる子育て〉」である。教育的働きかけは少ないが、父親は母親と一緒に子どもの教育やしつけや将来について話し合い、子どもの生活リズムを整え、遊びに付き合い、保育園の保護者会や行事に参加している。このタイプに該当する父母の教育的関心と関係性は二つのパターンに分けられる。

一つ目は、父母の教育的関心が比較的高く、父母が明確な意図をもって「子どもに任せる」こと

を選択するパターンである。メーカー企業に務めるJさん（大卒）は、習いごとについて「まだそういう時期じゃない」という。それは「私が全部スケジュール管理しなきゃいけないっていうのは絶対やだ」し、「ただ普通にだらだら遊ぶ時期が貴重」だからだと話す。彼女は、大学に務める研究者の夫が、「そういうなんか管理されない権利、全部子どもがそのスケジュールでガチガチにされてるのも、まあなんか良くない、なんかの権利を侵害してるらしくって」と言い、父母で意見が一致していることを強調する。知り合いの母親たちが熱心に習いごとをさせていることに「正直迷いもある」が、夫と意見を交わす中で子どもが幼いうちは家族一緒に遊ぶ時間を重視することに納得している。

二つ目は、母親が〈子どもに任せる子育て〉を支持する一方で、父親は教育的関心が比較的高く、〈親が導く子育て〉を支持するパターンである。この場合も父母が日常的に相談する様子がみられる。社会福祉施設で働くKさん（専門卒）は子どもには「特になにもやらせていない」し、「文字も勝手に保育園で覚えてくる」ので親が学習に付き添う必要性を感じていない。一方、同業の夫（大卒）は読み聞かせに熱心で、図書館で「ガサッと30冊くらい借りてくる」という。

絵本とかは、私はあんまり興味がなかったんですけど、だから「もう寝る前のいらんじゃない？」みたいな感じだったんですけど、パパは「いや、やったほうがいいんだよ」って言って、どうせパパが読むから「じゃあどうぞ」みたいな。（Kさん 社会福祉士・専門卒）

以上の二つのパターンは、「子どもに任せる」ことが子育て方針の中心にあるが、父母が子どものしつけと教育について話し合い、協力して生活習慣を守らせ、ゆるやかな教育的意図によって子どもの育ちが方向づけられている。

学歴については、父母12組のうち両方大卒が7組、父親だけ大卒が3組、両方非大卒が2組で学歴が比較的高い。父母は子どもを積極的に導こうとしないものの、日常的な父母間の相談と父母双方の子どもへのかかわりを通じて親が所有する文化資本の伝達が行われていると考えられる。

また、〈子どもに任せる〉ことを支持する場合でも、母親たちはしつけが十分にできないことや、習いごとが少ないことに不安を覚えていた。しかし、上記JさんやKさんの事例にみられるように、父親と相談したり、父親が教育的役割を果たしていることで不安を緩和している様子がみられた。

#### 4) 母親に偏った〈子どもに任せる子育て〉

最後の「母親に偏った〈子どもに任せる子育て〉」は、母親がしつけを担うが教育的働きかけは少なく、父母それぞれが可能な範囲で子どもの「やりたいこと」を尊重するパターンである。父母の間には「本人次第で」「自由に」育てようとするゆるやかな合意があり、家庭学習や習いごとなど学力や進学に結びつくような教育への投資は限定的だった。父親は子どもと遊びはするが、しつけへの関与は少なく、母親に任されていた。

例えば、3人の子どもを育てる医療従事者のLさん（専門卒）は、子どもが「いずれ自分のことは自分でできるように」、食事の配膳と片付け、保育園の準備、歯磨きなど、細かく指示を出して子どもを誘導している。しかし、仕事が忙しく、「時間も限られた中、短い時間の中でいろいろ支度とかやらせてるのもあってどうしてもイライラしがち」である。一方、Lさんの夫は子どものしつけに口を出すことはない。Lさんは子どもの遊び役として父親を頼っているが、父親がスマホゲームを片手に子どもの遊びに付き合っていて、「あんまり子どもを見ていない」ことに不満をもっている。

もうちょっとちゃんと、ちゃんとしなさいって気がしますね。どうしても、携帯、スマホ

をすぐいじっちゃうので。パパ今呼ばれてたよ、話しかけられてたよとか、そういうのがちょこちょこ気には。(Lさん 医療従事者・専門卒)

介護士として働くMさん(高卒)も父親が休日はゲームに没頭するので、「行けーって子どもを行かせて背中に乗らせる」と話す。彼女は父親が自分の時間をもつことには寛容だが、子どものしつけに積極的にかかわらず、「怒り役もなだめ役も全部私がやってる」ことに苛立ちを表す。「やっぱりお父さんはお父さんっていう認識はしっかりもってほしい」ので、「パパなんだから、いい、悪いはちゃんと怒んなきゃ駄目よと言う」。

このように、母親たちは〈子どもに任せる〉ことを支持するため、父親に教育的働きかけは期待していないが、しつけや遊びについては子どもに寄り添って父親役割を果たしてほしいと考えていた。だが、父親は十分にその役割を果たしていなかった。このタイプの母親たちは、習いごとや家庭学習が少ない分、母親に偏った〈親が導く子育て〉を実践する母親ほど家庭教育の重圧を感じていない様子だった。とはいえ、父親が子どもを放任する態度をみせ、しつけにほとんど関与しないことは仕事との間に葛藤を生んでいた。上述のLさんは3人の子どもの世話としつけが大変なので、「できればフルタイムをやめてパートにしたい」と話す。

このタイプに該当する父母は、両方大卒が1組、片方大卒が2組、両方非大卒が6組で、4タイプの中で最も学歴が低い傾向がみられた。半数の母親は家計の厳しさに言及し、習いごとや子どもが大学進学したいと言ったときにかかる費用について不安をもっていた。習いごとの数が少ない理由には家計の厳しさも関係している。さらに家庭教育の中心はしつけで、父母が教育について相談したり、教育的な働きかけをするということが少なかったことから、4タイプの中で子どもの教育機会が最も制約されているといえる。

## V. 結論

本稿では第一に「働く母親はどのように母役割と家庭教育を意味づけるのか」、第二に「どのように父親と分担しながら家庭教育を実践しているか」という問いを通じて、共働き世帯における「教育する家族」の分化を明らかにした。そのモデルをもとに、家庭教育をめぐる働く母親の葛藤と、家庭教育を通じた就学前からの階層間格差の形成を考察してきた。以下に結果をまとめる。

第一の問いについては、天童・多賀(2016)や大和ほか(2008)の枠組みをふまえて家庭教育を「しつけ」と「学校教育へのレディネスや子どもの地位達成をめざした意識的働きかけ」に分けて分析した。その結果、学歴や職業にかかわらず、母親たちは子どものしつけに責任感をもち、仕事との間で葛藤しつつ子どもの生活習慣を整えようとしていた。母親たちは働いていても「教育する家族」を志向していたといえる。一方、学校教育へのレディネスや進学を意識した教育的働きかけについては、母親たちの間に異なる役割意識と意味づけ——〈親が導く子育て〉と〈子どもに任せる子育て〉——がみられた。〈親が導く子育て〉は母親の時間と労力を多く要する。そのため、仕事との軋轢がより多く語られた。

要するに就学前の子どもを育てる働く母親たちの中には、親が子どもを導くことを重視して「しつけと教育」の両方にとりくむ者と、子どもに任せることに価値を置いて、「しつけ」はするが教育からは距離をとる者がいた。前者は大卒の母親、後者は非大卒の母親に支持される傾向がみられたが、母親の学歴によって子育ての違いが鮮明に表れたわけではなかった。大卒で働く母親の4割は「子どもに任せる」子育てを志向していた。この背景には「子どもが小さいうちは自由にさせたい」という明確な教育意識や、働いているために平日子どもとの時間が取れないので休日は家族でのんびり過ごしたいという時間負債の意識がみられる(額賀・藤田 2021)。

第二の問いについては、前述の子育てタイプを父母の役割分担を考慮してさらに分類した。その結果、①父母協働志向の〈親が導く子育て〉、②母親に偏った〈親が導く子育て〉、③父母協働志向の〈子どもに任せる子育て〉、④母親に偏った〈子どもに任せる子育て〉の4タイプが、共働き世帯の「教育する家族」の類型として見出された。

母親の葛藤に注目すると、父母協働志向(①③)では家庭教育の負担が父親の関与によって軽減されていた。とくに①では母親が父親を「巻き込む」ことで、父親がしつけと教育に日常的に関わる様子がみられた。一方、家庭教育が母親に偏っている場合(②④)、父親が子どもと遊ぶ役割を担う一方、しつけや教育に積極的に関わらないことに対して母親たちから不満の声が多く聞かれた。特に、「親が導く」ことを支持する母親たちは負担が重かった。大和ほか(2008)によれば、共働き家庭の母親は専業主婦の母親に比べて、父親が子育てに全面的に関わることを期待する傾向が強い。しかし、本調査からは共働き家庭の中に、「遊ぶ」ことはするが「しつけや教育」にほとんど関与しない父親が多く存在することがわかった。このパターンには階層の影響がみられる。父母協働志向に該当するのは「父母共に大卒」が最も多かったが(22家庭中14)、母親偏重は「父母共に非大卒」(20家庭中9)が最も多く、「父母のどちらかが大卒」が5家庭、「父母共に大卒」は6家庭であった。父母の学歴が相対的に低いほど、父親の家庭教育への関与が少なくなる傾向がみられる。

さらに、この「教育する家族」の分化モデルからは、家庭教育を通じた「連続的なグラデーション」の格差(本田 2008)が就学前から生じていることを指摘できる。「父母とも大卒」の割合が最も多かったのは父母協働志向の〈親が導く子育て〉で、そのあとは順に父母協働志向の〈子どもに任せる子育て〉、母親に偏った〈親が導く子育て〉、母親に偏った〈子どもに任せる子育て〉で

ある。父母の教育的かかわりや教育資源の多寡に注目すると、主に大卒父母が実践する父母協働志向の〈親が導く子育て〉と、主に非大卒父母が実践する母親に偏った〈子どもに任せる子育て〉の格差が顕著である。前述のとおり、母親たちの中には「親が導く」か「子どもに任せる」かについて階層差は鮮明に現れなかった。しかし、子育て理念と父母のかかわりの違いが組み合わさることで、階層の上位と下位の間に、家庭教育を通じた大きな格差が就学前から生じている可能性が明らかになった。

以上の知見をもとに、「教育する家族」における階層間格差と家庭教育をめぐる働く母親の葛藤について最後に結論を述べたい。

「教育する家族」の格差問題は父母の役割分担に注目した神原(2001)によって提起されているが、そのモデルでは家庭教育の理念や実践の違いが考慮されていない。本研究では子育て理念と父母の役割分担状況の二つを分析軸にして、働く母親たちの語りから「教育する家族」の4タイプを見出した。4タイプの間には父母の教育的関心やかかわり、子どもに与えられる教育資源の違いが顕著にみられ、それは親の階層を反映していた。このことから家庭教育を通じた格差の形成を分析するには、「家庭教育の意味づけ」と「父母の役割分担」の両方に留意することの重要性が示唆される。品田(2016: 204)は、家族社会学では「意外なほど親が直接(子どもに)手をかける時間や手間ひまのことが語られていない」と指摘する。母親だけではなく父親がどのような教育意識をもち、実際にどのようにしつけと教育に関与しているかを丁寧に見ることで、家庭教育を通じた格差の再生産過程を解明していくことが可能になるだろう。

また本研究からは、「教育する家族」と仕事との間で板挟みになる母親の葛藤が、「親が導く」という教育への強い責任感と、父親の教育関与の少なさによって形成されていることも示唆された。「親が導く」ことを母親たちが支持するのは、

新自由主義の中で各家庭の教育選択が子どもの地位達成に大きく影響することへの不安があるからである（喜多 2012）。「親が導く」ことは子どもの学業達成に有利に働く一方、行き過ぎた親の関与は子どものストレスや自立の妨げになることも危惧される（柏木 2008）。「親が導く」ことの重圧から働く母親たちを解放するためには、子どもの学びと育ちを保障し、働く母親たちが子どもたちを安心して預けられる質の高い就学前保育を拡充していく必要があるだろう。このことは、家庭教育を通じた就学前から格差の是正にもつながることが期待される。

父親の教育関与の少なさは非大卒の父親でより顕著に現れたが、大卒・ホワイトカラーの母親が父親と平等に家庭教育を分担していたわけではない。協働志向の父母であっても子どものジェネラル・マネージャーとして奔走するのは母親であり、父親は補佐的な役割に終始していた。この原因については今後より深い分析が必要であるが、父親が母親と子どものしつけと教育について話し合い、日常的に関わる策を講じていくことが、母親たちの家庭教育の負担を軽減し、就労継続を可能にすると考えられる。特に非大卒の父親が家庭教育に関われるようにすることは、格差の再生産を抑制する効果もあるだろう。

最後に本研究の限界として、母親を通じた父親の教育的かかわりを分析するにとどまり、父親の教育関心や家庭教育へのかかわりの実態を深く捉え切れていないという点が挙げられる。また、調査地域が首都圏に限られており、「教育する家族」の分化モデルを抽出したものの、別の地域では異なるパターンがみられる可能性は大いにある。今後の課題としたい。

#### 【謝 辞】

本研究は東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター・SEEDプロジェクトの助成を受けた。調査協力者、査読者の皆様に記して感謝申し上げる。

#### 【注】

- (1) 母親の就労効果については末盛（2011）が詳細にレビューをしている。母親の就労が子どもにも与える影響についてはさまざまな結果が出ているが、少なくとも悪影響を与えるという一貫した結果は出ていない。

#### 【文 献】

- 荒牧草平, 2019, 『教育格差のかくれた背景——親のパーソナルネットワークと学歴志向』勁草書房。
- Bourdieu, P., 1986, "The Forms of Capital," J. G. Richardson ed., *Handbook of Theory and Research for Sociology of Education*, Westport: Greenwood, 241-58.
- Brown, P., 1990, "The 'Third Wave': Education and the Ideology of Parentocracy," *British Journal of Sociology of Education*, 11(1): 65-85.
- Coleman J. S., 1988, "Social Capital in the Creation of Human Capital," *American Journal of Sociology*, 94: S95-S120.
- 濱名陽子, 2011, 「幼児教育の変化と幼児教育の社会学」『教育社会学研究』88: 87-102.
- Hays, S., 1998, *The Cultural Contradictions of Motherhood*, New Haven: Yale University Press.
- Hochschild, A. R., 1997, *The Time Bind: When Work Becomes Home and Home Becomes Work*, New York: Metropolitan Books.
- 本田由紀, 2008, 『「家庭教育」の隘路——子育てに強迫される母親たち』勁草書房。
- 石川由香里・杉原名穂子・喜多加実代・中西祐子, 2011, 『格差社会を生きる家族——教育意識と地域・ジェンダー』有信堂高文社。
- 神原文子, 2001, 「〈教育する家族〉の家族問題」『家族社会学研究』12(2): 197-207.
- 片岡栄美, 2018, 「子育て実践と子育て意識の階級差に関する研究」『駒澤大学文学部研究紀要』76: 1-27.
- 苅谷剛彦・志水宏吉編, 2004, 『学力の社会学——調査が示す学力の変化と学習の課題』岩波書店。
- 柏木恵子, 2008, 『子どもが育つ条件——家族心理学から考える』岩波書店。
- 金南咲季・伊佐夏実, 2019, 「インタビュー調査からみる就学前の子育て」伊佐夏実編『学力を支える家族と子育て戦略——就学前後における大都市圏での追跡調査』明石書店, 53-68.
- 木下康仁, 2003, 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い』弘文堂。

- 喜多加美代, 2012, 「家庭教育への要請と母親の就業——母親の就業を不利にする教育のあり方をめぐって」宮島喬・本田量久・杉原名穂子編『公正な社会とは——教育, ジェンダー, エスニシティの視点から』人文書院, 118-37.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2017, 『第15回出生動向基本調査(夫婦調査)』.
- Lareau, A., 2011, *Unequal Childhood: Class, Race, and Family Life, With an Update a Decade Later*, Berkeley: University of California Press.
- 西村純子, 2014, 『子育てと仕事の社会学——女性の働きかたは変わったか』弘文堂.
- 額賀美紗子・藤田結子, 2021, 「働く母親の時間負債をめぐるジレンマ——『教育時間』と『自由時間』の創出にみる階層格差」東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター編『発達保育実践政策学研究的フロンランナー 第2巻』中央法規出版, 128-48.
- 落合恵美子, 2019, 『21世紀家族へ——家族の戦後体制の見かた・超えかた 第4版』有斐閣.
- 品田知美, 2016, 「子どもへの母親のかかわり」稲葉昭英・保田時男・田淵六郎・田中重人編『日本の家族1999-2009——全国家族調査「NFRJ」による計量社会学』東京大学出版会, 203-15.
- 総務省統計局, 2020, 『労働力調査』.
- 末盛慶, 2011, 「母親の就業特性が子どもに与える影響に関する研究動向と今後の課題——3つの理論仮説と先行研究の検討を通して」『日本福祉大学社会福祉論集』124: 55-70.
- 多賀太, 2011, 「教育するサラリーマン——チューターとしての父親像の台頭」多賀太編『揺らぐサラリーマン生活——仕事と家庭のはざままで』ミネルヴァ書房, 127-58.
- 天童睦子, 2013, 「育児戦略と見えない統制——育児メディアの変遷から」『家族社会学研究』25(1): 21-9.
- 天童睦子・多賀太, 2016, 「『家族と教育』の研究動向と課題——家庭教育・戦略・ペアレントクラシー」『家族社会学研究』28(2): 224-33.
- Yamamoto, Y., 2015, "Social Class and Japanese Mothers' Support of Young Children's Education: A Qualitative Study," *Journal of Early Childhood Research*, 13(2): 165-80.
- 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子編, 2008, 『男の育児・女の育児——家族社会学からのアプローチ』昭和堂.
- 矢澤澄子・国広陽子・天童睦子, 2003, 『都市環境と子育て——少子化・ジェンダー・シティズンシップ』勁草書房.